

シンポジウム 品田悦一『万葉集の発明』を巡って

古 橋 信 孝

上代文学会のシンポジウムで、個人の著書が取り上げられるのは初めてと思う。歴史的にみれば、画期になる書物はあるわけで、それらを取り上げてシンポジウムをもつことはあつてよかつた。そうならなかつたのは、その時点で評価が共通性をもてなかつたことだろう。ほんとうは、そういうことはとてもなさないことだ。学者なら、知の世界の普遍への視座をもっているべきで、そこから評価すれば、何年か、譲つても何十年に一冊くらい、方法を巡つての画期的な書物は共通性をもてたはずだ。職人は生みだしでも、批評する目は育てられなかつた、あるいは、批評を遠ざけてきた上代文学会ということ、今回の企画は、あらためて考えさせられる企画だつた。

その企画は、シンポジウム委員会の、特に金井清一氏が提案したという。氏は、戦後の古代文学研究を切り開いてきた世代の一人で、私も若い頃、書かれたものから教えを受けている。その金井氏が、この本によって、万葉集だけでなく、古代文学に携わるわれわれの根本的な問題を、あらためて突きつけられたということで、今回のシンポジウムはもたれることになった。

はつきりいえば、私自身は『万葉集の発明』が明らかにしたようなことは、わかりきつたことではないかという感想が正直なところだ。こういう問題は、一九七〇年代に明確に出されていた。権力や国家というものを、無意識領域まで含めて考えさせられたからだ。当時の、東京大学文学

部国語国文学科の大学院生が中心の国文共闘会議は、自己の学問及び社会的な位置を検討し、体制側の加害者としての役割を教育に見出している。まさに、品田氏が書いている問題そのものなのだ。

七〇年代は、そういう問題を経過して、日本文学研究はどのようにあるべきかの模索が始まった時期だった。平安文学研究では「物語文学研究会」が発足するし、古代文学会では、「セミナー運動」が始まった。日本文学研究史の古代の分野の画期としては、戦後日本文学協会の発足という大きなでき事が最初で、次はこの二つといえる。なぜなら、この二つは、時代という研究領域を超えて、文学や文学研究、思想までを問うていたからだ。

古代文学研究の分野でいえば、特に古事記や日本書紀が国家の語りだとするならば、それ以前の語りとはどのようなものだったのかの疑問を深刻に問うた。いわば、反国家、反権力とはいかに可能なかが根底に据えられて、古代文学研究が展開していたのだ。具体的には、国家以前の村落共同体とも呼ぶべきものの伝承、神話への視点が探られた。文学発生論である。つまり、発生論は国家、権力に村落を対置し、国家、権力の向こうへ行こうとしたのである。したがって、それは折口信夫の発生論とは違っていた。天皇制に行き着かない村落共同体のあり方と表現を考えてい

た。

ただし、折口の古代文学をみる方法は継承された。古代文学研究が無自覚に近代の理解を当てはめていることに苛立ち、古代の世界観を理解し、その感受性や想像力に近づこうとした。しかし、われわれがこの世界に生活してあることから逃れられないのだから、繰り返し古代との往還運動をすることしかできないと考えていた。

古代に通じる感受性はどのように作っていけるかという問題として、フィールドがあった。特に沖繩の村落がフィールドの対象になった。沖繩の村落を通じて、古代を幻想したのだ。それは、村々に伝えられる神謡が日本の古代歌謡以前を推定させることが根拠だった。私の「生産叙事」や「巡行叙事」という概念は、古代歌謡以前を明確にしたものとして、今でも自信をもっている。

しかし、九〇年代に、沖繩に古代をみるのは誤りだという批判があらわれる。それは、結局古代をどのように捉えるかという問題と言ひ換えることができる。文化人類学の成果によって、われわれはいわゆる未開民族の社会を知っている。そういう社会を見据えながら、古代的なものを沖繩の先島の村々をみていた。その意味では、沖繩の現実を見ていないといえないこともない。

しかし、私個人のことをいわせてもらえば、近代のなか

でさまざまな矛盾を抱えていく村々と人々の姿を見続けていたつもりである。私は、村々の人々に向かつて沖繩はいいといったことは一度もない。実際にそう思ったこともない。ただ、祭のような、みんなが一体となれる装置はもっている。その装置を成り立たせているのが古代的な要素なのだと考えていた。つまり、私は、沖繩の向こうに、世界に普遍的な古代の社会や文学を幻想していたのだ。というのは、私は大きなモチーフとして、日本の古代文学研究を世界に通じるものにしたと考えていたからである。いや、世界の水準も決して高いと思っていなかった。西欧の研究は、ほとんど近代的な感受性のなかで行われていると思えていた。したがって、古代文学研究の世界水準をあげようという意志をもっていた。

七〇年代の古代文学研究の先端はこういう状況だった。だから、これも、正直にいわせてもらえば、金井氏の『万葉集の発明』にショックを受けたという発言は、むしろ私にとつてショックだった。私たちが、いわば命がけで問うてきたことは、ほとんど理解されなかったということになるのだから。万葉集は、日本が近代国民国家を形成しようとしたとき、その民族のアイデンティティとして発明されたというようなことは当たり前であり、そういうことを前提として現在の研究があるという共通理解がある程度は成

り立っているというようなことは、われわれの思いこみだったということなのだから。

二

シンポジウムは、島田修三氏の、明治期において、短歌が実際に担うことになった働きからの批判、というか問題提起、岡部隆志氏の、「発明」という時間を切断した捉え方とは異なる歴史のあり方からの問題提起が目立った。

島田氏は、日露戦争に従軍した兵士たちが自己の個人的な心の表現を短歌としてもったことなどをあげ、文学者でもない人々が表現の方法をもっていることに価値をあたえているといえる。このような見方については、かつて短歌形式にうたいあげることで、たとえば戦争への批判などが解消してしまうという論があった。そういう批判はありえないことはないが、われわれの生活が一つの倫理や思想で成り立っているわけではないことを考えると、観念的に過ぎる。どのような言葉も戦争を賛美できれば、批判もできる。辛い心をなだめることは、どのような表現形式でも必要なものだろう。そういう言葉、表現の普遍的な面を、短歌批判にもつていくのは、最初から短歌を悪いと決めているからだ。

ついでに、『万葉集の発明』への批判として、佐佐木幸

綱氏の、近代に万葉集が見直されてくる理由の一つに、「われ」などの一人称が、他の歌集に比べて万葉集には圧倒的に多い、ということがあるという指摘をあげておこう。個人の能力に依拠しようとする近代社会のなかで、自己を表現した歌集として評価されたということになる。

岡部氏の批判は、短歌はずっと詠み継がれてきたわけで、それが何なのかという問題が一方にあるのではないかというものだったと言ひ換えられる。つまり、人間や社会は受け継がれてきたものによって成り立っているところがあり、それを歴史というレベルで捉え直す必要があり、そういう面からの接近をしないと、近代短歌の問題も解けないということである。

岡部氏の論は島田氏の発言と通じる。そして、私が生活といている問題と近い。しかし、これらの批判は『万葉集の発明』とはすれ違っているということもできる。品田氏は、そうでしょうね、でも、私は万葉集が国民国家のイデオロギーを担ったという点だけを論じているのです、と応じることができる。事実、岡部氏の時間の継続の面はどう考えるかという質問に対して、品田氏は、「伝統」など継承とは違うところから考えたのだと答えている。ほんとうは、岡部氏は「伝統」などではない継承をいつているのだが、その問題は後にして、このすれ違ひは、なぜ起きた

のかが今回のシンポジウムを象徴する。島田、岡部、私にとつて、やはり『万葉集の発明』が提起したような問題は前提であり、だからどうするのだというところに考えがいつているのだ。私自身は、『万葉集の発明』は、現在も万葉研究の根本に明治期に発明された万葉集に対する見方が潜んでいるといつているのだから、現代までの研究史への検討がなされているはずで、そこから、本書で書かれている以外のことを引き出すことで、万葉研究の今後への視点を出せればということから、シンポジウムを司会していったつもりだ。その意味で、われわれは『万葉集の発明』を批判していたわけではない。

私は本書について、われわれが当たり前と思っている国家や権力への負の想いを、リアルに感じるためにはこういう作業をしていかざるをえないのだと思うという意味のことをいい、品田氏と同世代の研究者にそれは好意的な見方だといわれたことがある。現代は、北朝鮮の拉致問題に対するジャーナリズムの反応に象徴されるように、日本は民主的な社会で、国家はわれわれの意志で動いており、国家が権力として働くのは北朝鮮のような国だと思わせる社会である。現代は権力がみえにくい社会なのだ。にもかかわらず、われわれはどこかに圧迫感を抱いており、それをどこに向けていいのかわからない。たとえば、拉致

問題で、北朝鮮を支持するような発言をすれば袋叩きになるだろう。自由な社会なら何をいつてもいいはずなのに、確実に排除をされる。こういうことは権力のはずなのに、そうとはみなさない。つまり負とは感じないような社会なのだ。身障者にはやさしくても浮浪者狩りをする高校生に、いくら生命の尊さを説いても効果ないのは、社会の一般的な考え方が外れた者を排除する権力になっているからなのだ。しかも、悪いことには、権力だと自覚していない。

そういう意味で、『万葉集の発明』のような作業はなされるべきだろう。権力や国家とは何かが問われることになるからだ。だからこそ、研究者としては、そうではない万葉集の読み方を提示していく義務が生まれてくる。

三

この国家や権力を実感できないという問題は、二一世紀にそうとう深刻になってくるはずだ。民主主義とは、大多数が無自覚なまま権力になることなのだから、世界がいわゆる民主主義、自由主義の方向に向かうとすれば、ますます矛盾が深くなることはまちがいない。

二〇〇一年九月一日の「同時多発テロ」以来のアメリカと日本の反応は、そういう問題を明確にした。自分たちを守るためには他人が犠牲になってもかまわないというの

が基本的な発想だった。貿易センタービルの死者を悼む一周年の日に、何人も無関係の日本人が出かけた。かれらは、アフガンの誤爆で亡くなった人々を悼むことはしない。明らかにアメリカの側に立っている。いや、アメリカだけでなく、いわゆる民主主義、自由主義の側に立っている。誤爆で人々を殺すのが許されるのは権力だ。したがって、かれらも権力の側に立っている。人間の側に立てば、貿易センタービルで亡くなるのが、誤爆で亡くなるのが等価値のはずなのだ。その意味で、セクハラを始め、かれらの主張する弱者の立場というのは疑わしい。ほんとうの弱者は、誤爆で死んでも、ただ受け入れるほかない人々ではないのか。いや、ほんとうのというような言い方はやめよう。セクハラで泣き寝入りする女たちは確かに守られる必要がある。問題は、組織を作って守ろうとする人々が、一方でプッシュを支持していることだ。プッシュの支持率は九〇パーセント近くになった。この数字は、イラクのフセイン支持が一〇〇パーセントというのに絶対嘘があるのに対して、真実、アメリカ全体がアフガン爆撃を支持したことを示している。

一年後、アメリカのなかでも反省する者があらわれ、それをアメリカの良心のようにいう者がいるが、そんな反省はまったく信用できない。アメリカはベトナム戦争、湾岸

戦争と多くの兵士以外の人々を殺してきた。このシンポジウムのパネラーである島田氏の「テロと『ならず者国家』アメリカ」(『短歌往来』二〇〇二年二月号)によれば、ベトナム戦争の民間人の死者は四百万人以上、湾岸戦争の死者は百万人という。こういうごく近い歴史をもちながら、アフガンの死者がアルカイダやタリバンの兵士だけですむと考えられるわけではない。そして、戦後、必ずといっていいほど、反省が出てくる。したがって、この反省は何にもなっていない。反省する者たちは、むしろ破廉恥としかいいようがない。アメリカの良心とはこんなものなのだ。そういう文化はどこかおかしくないか、そして、その文化をわれわれも受け入れている。これがわれわれに突きつけられている問題なのだ。

四

『万葉集の発明』は、明治期に万葉集が国民国家の民族的アイデンティティとして見出されたこと、つまり歴史を明らかにしたものだ。しかし、万葉集は八世紀か九世紀に編まれたものだから、「発明」という言い方は矛盾だ。この「発明」という概念は、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』などによるものという。あいかわらず、移入の概念のあてはめだ。本書の意図をいうのに、そんな

ものを引くまでもないにもかかわらず、なぜ「発明」でなければならぬのか。著者はいわゆる伝統との断絶をいいたかったからである。ならば、それ以前の万葉集は何だったのか。そこに、歴史が問われることになる。

その点で、岡部氏は、「発明」に対し、イデオロギーとは異なる、私の概念でいえば生活的な継承を提起している。いろいろ意味づけされるものとは違う意味での歴史だ。確か、岡部氏は歴史という言葉を使ったと思う。この歴史がいわゆる歴史学の歴史とも、社会史、生活史的な歴史とも異なるのは、個人の内面とかかわる表現の問題だからだ。短歌はどんな人も心を表現することの可能な方法としての意味を担ってきた。しばしば村々の祭に和歌があることが証拠だ。それがどのように形成されたかはまったく関係ない。天皇制と短歌を結びつける論は、まさに品田氏が明らかにした明治期以降のイデオロギー的な側面に対する批判でしかない。物質的な豊かさを社会全体の規模で追求してきた近代社会を全面的に否定するのと同じだ。

歴史については検討を要する。インド社会は、たぶん数千年変わらないことを基本としているようにみえる。たとえば、道路工事をしているすぐ脇で、婦人が柴を束ねただけの短い箒でかがんで砂利を掃いていた。たぶん、これも道路工事の一コマである。こんな非能率的なことはない。

少なくとも、柄を長くすればかまなくてすむ。こんな箒が数千年も使われ続けてきたに違いない。こういう箒が売られているのを見ると、箒作り、箒売りがカーストであることを思わせる。近代社会でも、そういう生活に密着した部分には、昔のままが続いている。ついでにいえば、最近カーストは身分制度ではなく分業体制だという論があり、さらに「カースト体系が構成する集団には、専門化と集団間の相互依存が認められる」という論もある（ルイ・デュモン『ホモ・ヒエラルキクス』田中雅一・渡辺公三訳、みず書房、二〇〇一年）。単なる身分差別制度とみる見方は、植民地として正当化するために、インド社会を選れた社会とみなしたイデオロギー的な偏見にすぎない。インドが数千年も同じ社会を続けてきたのは、その社会が西欧近代とは全く異なるものであり、評価を超えるとみるべきなのだ。岡田英弘によれば、イスラムが王朝を造る以前は、インドには歴史はなかったという。そういう言い方もできる。歴史を作らない社会がある。ピエール・クラストル『国家に抗する社会』で語られるインディオの社会も同じだ。しかし、普遍的な歴史を知ったところでなんだというのだ。歴史は鑑だというようなことがほとんど誤りなのは、戦争の悲惨を体験することで、戦争を二度としないようにしようというような素朴な反戦運動が、戦後の一時期のも

のでしかないことをみてもわかる。現在日本は戦争に荷担しているし、軍隊をもつことが必要だという論議が盛んになっている。

だいたい、古代の研究者は、現代の豊かな生活を享受しながら、古代への憧れを抱いている者がほとんどだろう。それを一概に否定する気はないが、研究対象としての古代とは何なのかは考えてしかるべきだと思う。われわれはどんな社会にしようと、完全に満足できるわけではないだろう。いくら満たされていたとしても、何かをきつかけに不満の面が前面に出る。私は人間の共通性を食べたり、寝たり、話したり、考えたり感じたりすること、そして生まれる年取り、死んでいくこと、子孫を残す、社会をなすことくらいまで極小化して、その上で考える必要があると考えている。そういうなかで伝えられていくものは何なのか、歴史をそういうレベルまで降ろして考えていく必要があると考えている。

五

二〇〇一年の九・一一以来、私は一神教と多神教を考えている。イスラム教とキリスト教の戦いというような単純な図式には興味はない。常に、問題は自分に引きつけて考えてみる必要がある。アメリカほどではないにしろ、ブツ

シユを応援する小泉の支持率はとても高い。なぜそのようなだろうか。われわれも、いわゆる自由主義、民主主義の社会になつてゐるからだ。ということは、この自由主義、民主主義が問題だということである。確かに、われわれは比較的的自由な生活をしてゐる。しかし、個人個人が自由に振舞えば必ず衝突が起こる。衝突を避けるには、普遍的な立場を考えるほかない。九・一一以来の問題もそうだ。自由を守るために関係ない人々まで殺すのは、自分勝手ではない。現在の人権といわれている問題も、そういう面を抱えている。

多神教はインドから東アジア、日本に広がつてゐる。いうまでもなく、中近東をアジアとみなす考え方は、ギリシヤ以来の発想で、後にイスラム教の国々を、その東の異教徒と一緒に差異化した概念である。だいたい、地中海を取り巻く地域の文化からヨーロッパも生まれてくるのだから、中近東もヨーロッパに含める考え方もありうる。キリスト教もイスラム教も同じ中近東から生まれたのだ。インドやいわゆる東洋はイスラム教やキリスト教に全面的に改宗することはなかつた。多神教の世界は一神教の神も多神の一つにみなしてしまふから、容易に受け入れられる。多神教の文化は異文化に対して寛容なのだ。

多神教の世界は神々が無数にいる社会である。キリスト

教やイスラム教のように神を唯一の眞実、絶対的な善と考へてみれば、多神教ではいくつも眞実や善があることになる。眞実と虚偽、善と悪というような二元的な思考は成り立たないわけだ。そうすると、ある神をいただく集団と別の神をいただく集団の間で争いになることが考えられないこともないが、最初から個人自身が複数の神々を信仰してゐるのだから、そのバランスも考えられてゐることになる。インドや日本は比較的平和な社会を造つてきた。中国も漢、唐、清など長い王朝が続いたのも、比較的平和だったことを示している。しかも、こういう社会は、支配者が変わるうが、統治される側はあまり変わらない生活が保障されてきた。王が暴虐の場合もあるが、それは、人間にはそういう面があり、王は人間の代表としてありうることに許容された。王朝交代も、社会の変革も、人間は一人一人異なるという本質から、変化は内包されると考えられていた。ただ、基本は変わらない。基本さえ変わらず、守られていれば、人々は自由な社会だったわけだ。

こういう社会では、人々は自然性と近いところで生活している。だから、人が死ぬことが動物が死ぬことと大差なく考えられている。仏が飢えた動物に自分の体を投げ出したという説話がある。動物の命も人の命も等価値にみなしている。さらに、殺されることも、運命として受け入れる

思想をもっている。多神教の世界では、人間優位ではないのだ。こういうところから、人間や歴史を見るとどうなるか、そういうことを考える必要がある。だいたい、日本の古典も多神教の世界だった。それを、一神教的に論じているのではないか。

『万葉集の発明』はイデオロギー批判の書物である。このイデオロギー批判も、そこに留まっている限りは一神教的なものではないか。批判し続けるかぎり常に正義の側に立っているからだ。品田氏が一神教を抜け出すには、批判した万葉集の読みに対し、自らの読みを対置する必要がある。でない、国家や権力に対して村落共同体を対置し、国家や権力の消滅を幻想したわれわれのほうが先に行っているといえてしまう。